TOKUMA NOVELS

草野唯雄
寝台特急「はやぶさ」は止まった

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四ノ一〇　郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一　振替東京四—四四三九二

Tadao Sōno　©1982
落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan　〈編集担当　小島浩郎〉
83B10b

ISBN4-19-152637-5

長篇トレイン・サスペンス

# 急台「はやぶさ」は止まった

早野唯雄

間書店

寝台特急「はやぶさ」は止まった／目次


一章　準備　7
二章　決行　64
三章　逃走　156
四章　韜晦（とうかい）　223

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

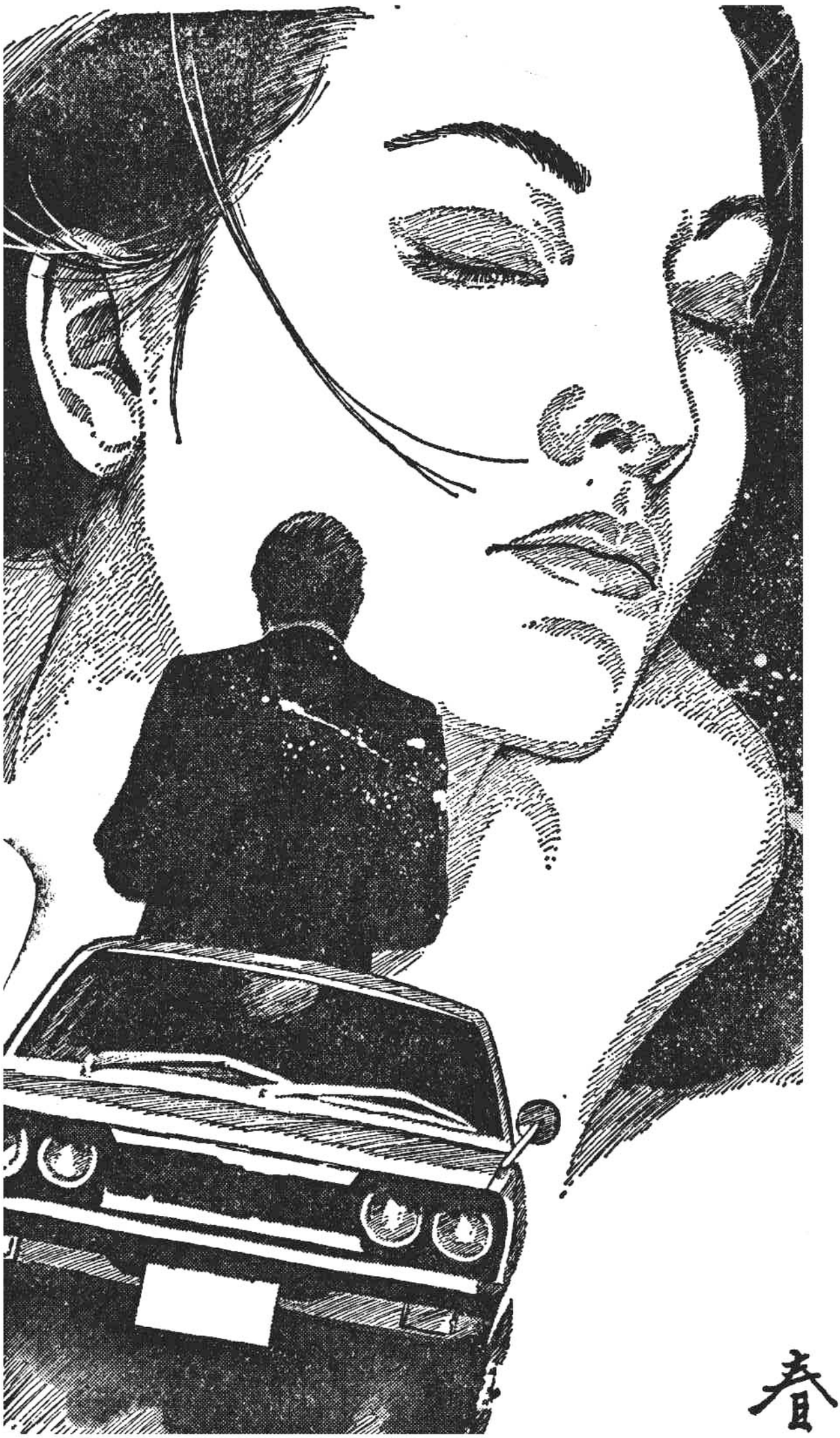
本文挿画・居島春生

# 一章　準備

## 1

福岡県田川郡赤池町。
昔、この辺りは筑豊炭田地帯のド真ん中であった。
〝ああ行って、こう行きゃ、豊前の赤池〟
と歌に残っているくらいである。
その炭鉱群が、エネルギーの座を石油に奪われて次次に閉山し、遂に全く消滅してしまってから既に久しい。
昭和五十×年六月十六日、水曜、正午。
この赤池駅に、ぶらりと降りた一人の男がいた。
背が高く、ガッシリした体つき。色の浅黒いふてぶてしい感じの顔。どこをとっても、一癖ありげな人物に見える。
カーキ色のサファリスーツのような上着にGパン。肩にはパンパンに膨らんだショルダーバッグをひっかけ、足は重そうな編上靴だ。
齢は、三十歳くらい。
出口につっ立ったまま、空を見上げた。
細かい雨が降っている。
彼のほかに降りた客はなく、国鉄伊田線の赤池駅は閑散としていた。事務室で、駅員は弁当箱を開いている。
雨のせいか気温が低い。五月上旬ぐらいの気温である。
その雨の中に、小さな田舎町がひろがっている。駅前の食堂、本屋、電機店など。中にはところどころ新しい店もまじっているが、全体的にくすんだような通りは昔のままで、ほとんど変っていない。
ただ、以前は駅頭に立つと、町並の背後にのしかかるように聳えたボタ山が見えたが、今はそれが消えている。恐らく取崩して整地したのであろう。
男は、駅から一歩足を踏み出した。
雨を気にする様子もなく、ゆっくり歩いて広場と道

を横切り、食堂のガラス戸をひきあけて入った。
ちょうど昼どきだが、先客は二人だけだった。作業着姿の若い男はドンブリに顔をつっ込むようにして飯をかき込んでいたし、年寄りの方は空の徳利を横に倒しておいて、ラーメンか何かをすすっている。
テーブルについた男は、壁に貼られたメニューを見回したあと、「ビールにうどんと巻ずし」を注文した。
五十年配の女主人が注文を聞いてひっ込むと、男はタバコに火をつけて店の奥に目を向けている。
何かを期待するような様子。
だが、その期待の相手は、店の奥からではなく、表戸から現われた。
「ただいま」
と声をかけて入ってきたエプロン姿の若い女が、ハッと立ちすくんだ。男と視線が合ったのだ。目をまるくして、
「宇都宮さん！」
と小声。
「ああ、久しぶりだね」
と男も小声でうなずく。
「いつ来たと？」
「いま、駅を降りたばっかりだよ」
「おっ母さんとは？」
「いや、まだおれとは気づいてない」
「何か用事のあって帰ってきたと？」
「うん、叔父貴に用があってね。それで明日から当分忙がしくなるけど、今夜だけなら逢える。九時に上野橋に来てくれんか」
「九時に上野橋ね。わかった」
「静子、何しよっと？　早よこっちきて手伝わんかね」
奥から声がかかった。
「はーい」
と、目くばせを残して奥へ消えたが、すぐにまた現われた。
盆に乗せたうどんとすし皿とビールを男のテーブルに置いて、声を低めた。
「宇都宮さんも、えらい貫録がついたね。うち、ちょっと見違えたよ」
「お互いさまだよ。静ちゃんも、すっかり女盛りにな





试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

って。まだ独身だろうね」
「ん？　うん、まだ一人。あんたも？」
「ああ、おれも」
「じゃ、あとで」
とひっ込んでゆく。
宇都宮と呼ばれた男は、ビール一本を空け、うどんとすしをきれいに食べ終った。勘定を払ったのは、静子ではなく女主人にだった。彼が昔この赤池炭鉱に働いていた宇都宮篤だとは、女主人は気付いていない。
もっとも、高校生の静子が、親にかくれて逢っていた相手に過ぎないのだから、気付かないのが当り前とも言えた。
食堂を出た宇都宮は、のんびりと町の一筋道を歩いてゆく。相変らず雨は気にしていない。ところどころ昔のままに残っている古びた商店などを、懐かしむように覗き込んでゆく。
やがて、通りからちょっと右に折れて、一軒の映画館の前で足をとめた。
おそろしく古ぼけた映画館だ。安っぽいモルタル壁はシミだらけで、その上至るところにヒビ割れが走っている。
正面切符売場の上に、
〝都合により閉館します。長らくのご愛顧、誠に有難うございました。
館　主
従業員一同〟
と、いかにも素人書きらしいビラが一枚。
壁の一ケ所に、剝ぎかけたままで放置されたピンク映画のどぎついヌードポスターが、雨に打たれてショボくれていた。
無人の入口を入ると、ガラスの陳列ケースが一つ。かつては、飲物や菓子が並べられていたやつだ。
その向うに、床まで届くような黒いカーテン。これも、色のはげてすり切れかけた代物である。
宇都宮は、カーテンをはねて奥に入った。そこはもう客席だ。横の通路側のドアが開けてあるので、そこからさし込む外光で、お粗末な椅子の並んだ客席と、ところどころ修理跡の見えるスクリーンをぼんやりと照らし出している。
「こんにちは――。浅井さーん」

と大声で呼ぶと、
「おーい」
という返事。
ガラガラと下駄の音がして、横手のドアから人が覗いた。
「どなたですか」
「叔父さんか。おれだよ。篤だよ」
「なんだ、篤か。いま着いたとか」
「ああ」
「昼飯は？」
「駅前で食ってきたよ」
「そうか」
「いつ閉館したの？」
「五日前」
「色ものでも、やっぱり駄目か」
「駄目じゃね。電気代もとれんごとなった」
「それにこの臭いじゃね。無理もないよ」
宇都宮が言った。

## 2

「におい？」と浅井がけげんな顔をする。
「トイレのにおいだよ。かすかにするだろ？」
「そうかなあ。気がつかんがなあ」
「いつもいる者には、気がつかんのだよ」
「注意して掃除しとるとじゃがね。ま、どっちみち、もう過ぎたこったい。さ、こっちきて上がれ」
と住居の方へ案内する。
「誰もいないの？」
「ああ、娘の千代は直方へ仕事探しに出かけとる。従業員も、それぞれ身の振り方ば段取り中で」
「その身の振り方だが、もうきまった者がいるの？」
「いや、まだ誰もきまっとらん」
「それで、明日皆に集るように言ってあるんだろうね」
「ああ、言うてある。実を言うと、皆お前の儲け話ば当てにしとるとよ。おれも借金とりに責められて、このままじゃ首でもくくらにゃならんとこまで追いつめ

られちょるが、皆も五十歩百歩でなあ。明日の暮しのメドも立たん。お先きまっ暗たい」
「そうと聞いたから、おれも来る気になったんだよ。一人じゃ絶対やれん仕事だが、六、七人が団結して捨身になったらやれる」
「ふうむ……。なんか、ヤバい話のごたるあるね」
「確かにヤバいよ。でなけりゃ、分け前一人一億という金は絶対摑めないよ」
「い、いち億？」浅井は目を剝いて、「ほ、ほんとか」
「ああ、ほんとだ」とうなずいて、「うまくいけばだがね。と言っても、皆が一生一度の大仕事とハラをくくって、死ぬ気でやりさえすれば、必ずうまくいく。おれには、自信があるんだ」
「相談してみて、いやと言う者がおったらどげんする？」
「そのときは、全部ご破算だ。おれは諦めて、ひきあげるよ」
「そうか。それなら、先ずこのおれがその話ば聞こうか。連中は、おれの命令なら火の中でも水の中でもとび込もうちゃ者ばかりじゃけん。おれがやろうちゃ気になったら、必ず全員ついてくる。おれがやる気になれんときは、そこまででストップして、連中には話さん。それでよかろが」
「わかった。それで、おれも異議はないよ」
「よし。それじゃ、いつ話す？」
「そうだな。今晩はちょっと人と逢う約束があるから」
「それも、仕事のことでか」
「いや、これは仕事とは関係ない。昔の古いなじみと、久しぶりに旧交を温めるのさ」
「それなら、いま聞こうか」
「その前に、叔父さん。ビールが飲みたいな。のどが乾いて」
「ビール？　ビールどころか、この始末たい」
と冷蔵庫を開けて見せた。
干からびた食パンの残りと干魚が二、三匹。それだけで、中はガランとしている。
「電話だけは、どうにか死守しとるがね」
「ふーん、それほどとは思わなかったが」とひとつ溜息をついて、「じゃ、水で我慢するよ」

水をのんで一息ついてから、始めた。
手帳をひろげて、宇都宮が説明する。
浅井が質問する。それに答える。浅井が腕を組んで考え込む。
又、質問する。答える。
今度は、討論になる。それが熱っぽくしばらくつづいたあと、宇都宮が説得して浅井がうなずく。
そのくり返しが、長い時間つづいた。
すべての討議をやり尽し、状況を検討し終って、あとは浅井がどう決断するかだけが残った。
確かに空恐ろしい仕事である。
相当の度胸と勇気なくしては、やれない。普通の平凡な社会人なら、話だけでもブルってしまって尻込みするだろう。
だが、浅井は少し違っていた。
若い頃は極道の限りを尽し、福岡の姪ノ浜の親分のもとで、組の幹部にまでのし上った前歴がある。その名残りは、二の腕の桜の花びらと盃の入れ墨として、いまも残っている。
四十過ぎころから興行の世界に転換して、生地の赤池町に鶏鳴館という映画館を開設した。
が、これが誤算だったのだ。
既に斜陽化のきざしを見せていた石炭産業が、急坂を転落する石のように衰退の一途を辿り、赤池炭鉱も閉山した。町の人口も激減して、鶏鳴館もそれまでの古い日本映画上映をやめてピンク路線に転換した。だが、それもテレビの奔流の前には、持ちこたえられるはずもなかったのである。
そんな過去を持つ叔父の浅井五郎がどう決断するか、宇都宮は息をつめるような思いで待った。
だが、このとき、宇都宮にとっては従妹に当る千代が帰宅したのだった。
それでその話は中断された。
それからは、久しぶりの甥の帰郷を迎えた父娘の歓待という世間並の光景と変った。もっとも、歓待といってもドン底の父娘には何もできない。
代りに宇都宮が自腹を切ってにぎりずしの出前をとり、千代にビールを買ってこさせて乾杯したのだった。
千代は、きりっとした利巧そうな娘に成長していた。少女の頃のスリムなタイプはいまも変っていないが、

それなりに女らしいふくよかさも感じさせる。
「いやあ、千代ちゃんも美人になったなあ。見違えたぞ」
と宇都宮におだてられても、
「おだてても、なんにも出んとよ。ごらんのとおり、いまうちは火の車じゃけん」
と、しゃーしゃーとやり返す。
貧窮にめげたような暗さは、少しもない。不幸を笑ってはね返すようなバイタリティさえ感じさせる。
(うん、この娘なら当てにできるな)
宇都宮は、そう感じた。
八時半に、約束があるからと言って家を出た。雨はいつか上って月が出ていた。
町を抜けて、彦山川の堤防道に上る。
川の流れは益々痩せ細って、昔石炭を積んだゴヘダ舟が往復したなどと聞いた面影は、もうどこにもない。
この道を少し下流の方へ歩くと、上野橋がある。橋を渡れば上野村。その奥の山裾あたりに名勝〝上野の滝〟や上野焼の窯元などがある。
宇都宮がこの橋に来てから二、三分経って、女の影が小走りに近づいてきた。
静子だった。
「待った?」
「いや、いまきたところだよ」
橋を渡って向う側の堤防に出れば、人目は全くない。昔、二人がデートした思い出の場所だ。二人の足は、自然とそっちに向った。

## 3

橋を渡り終って、堤防道を少し右の方へ歩く。
桜の老木が一本ポツンと立っていて、その下の草むらが思い出の場所だ。
ほかの場所ほどではないが、それでも夕方までの小雨で草はしっとりと濡れている。宇都宮がためらっていると、静子が持ってきたビニールシートを拡げた。
なかなか用意がいい。そう思ったが、口には出さない。腰を下ろして、タバコをとり出した。静子が、横に並んで腰を下ろす。
背後は暗く広々とした水田。前は彦山川とその河川

敷。どこを向いても、人影一つない。
「ここで静ちゃんとデートしたなあ」タバコに火をつけて、宇都宮が述懐した。「あれは、何年前だったかなあ」
「ちょうど十年前よ。うちが十六のときじゃったけん」
当時宇都宮は二十で、赤池炭鉱の鉄工場で働いていた。直方の高校に汽車通学していた静子と知合ったのは、やはり彼が赤池食堂の常連だったからだ。
「あのときはおれが無茶して、静ちゃんのスカートの紐が切れてしまって……」
「うん、そうじゃったねえ」
草の上に押し倒された静子が、キスと乳房の愛撫までは受入れた。だが、図にのった宇都宮がスカートの中に手を入れると、
『いけん、いけん』
と拒みはじめた。それで揉み合うはずみに、静子のスカートのゴム紐がプツッと切れてしまったのだ。
のぼせ上って夢中だった宇都宮も、それで出鼻をくじかれて詫びる始末。そこであの夜のデートは打ち止めとなったのだった。
帰路、静子がスカートを手でひき上げひき上げして、いかにも歩きにくそうだったのが、いまも彼の記憶に残っていた。
「ところで、お嫁の話はまだかい？」
「うん、気のすすまん話なら何度もあったばってん……。いまも一つあるとよ」
「ほう」
「直方の成金饅頭屋の息子さん」
「へえー。で、それも気がすすまんの？」
「向うが再婚じゃけんね。でも、もうちも二十六でしょう。あんまり選り好みもできんし……」
「で、はいと返事したんか」
「まだよ。でも、お父っつぁんもおっ母さんも大乗気で、もう断り切れんとこまで……」
「二週間ばかり、その返事をのばせんかね」
「えっ？」
「いや、あと二週間もしたら、ちょっとした店を開くぐらいの資金ができる当てがあるんだよ。だから、そんときは堂々と真正面から結婚申し込みに行くよ」


试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com